

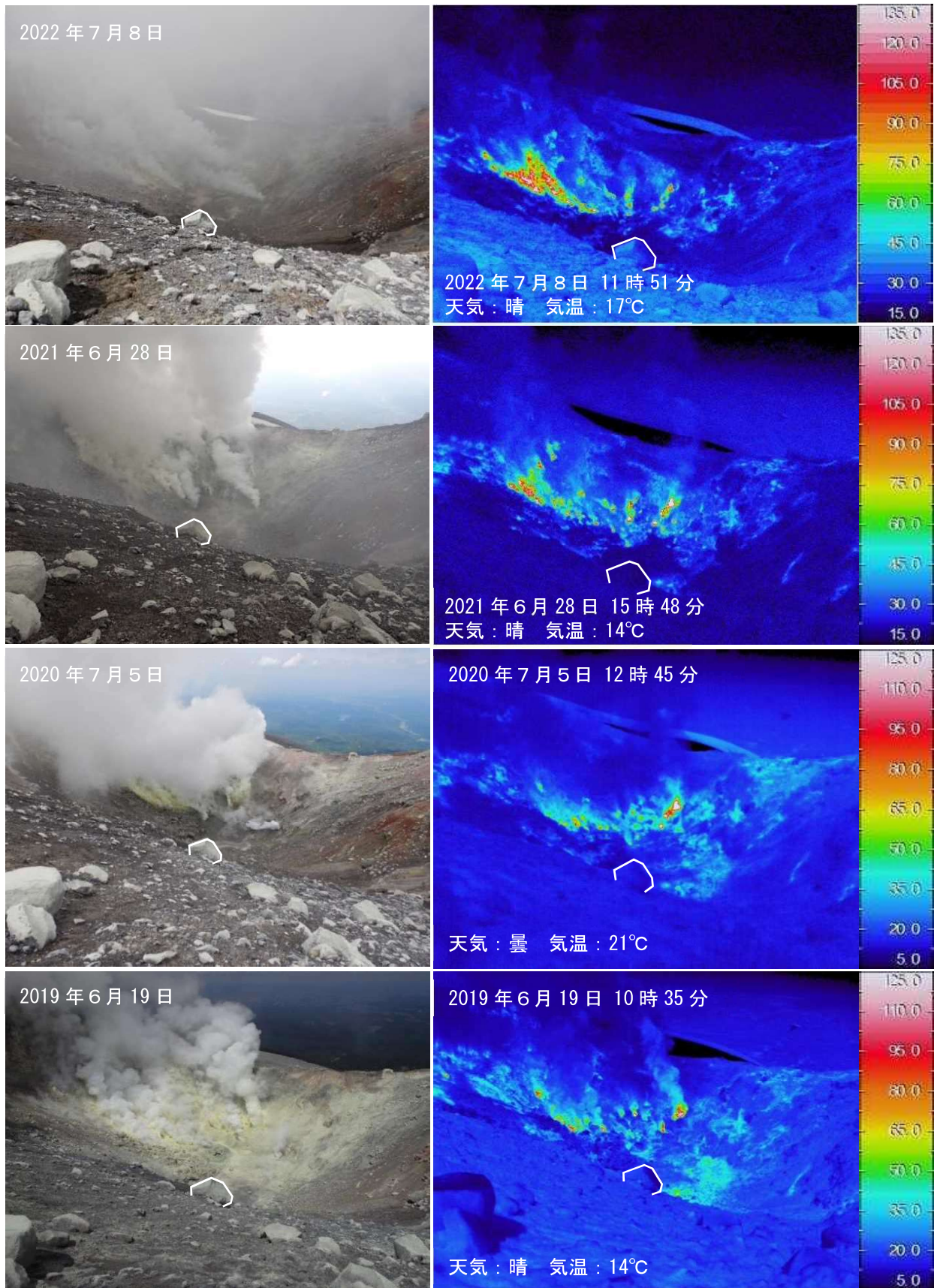


図 8 十勝岳 62-2火口内の状況及び赤外熱映像装置による地表面温度分布

南東側（図 3 の⑥）から撮影 図中の白色実線は同一の転石の輪郭をトレースしたもの

- ・火口内壁の北西側～南側は高温の状態が継続しており、昨年と比べ地表面温度分布に明瞭な変化は認められませんでした。
- ・火口内への硫黄の付着と一部噴気孔からの熔融硫黄の流出を確認しましたが、分布は活発な噴気孔周辺に限定されていました。

2022 年 7 月 15 日



2021 年 6 月 29 日



2020 年 6 月 12 日



2019 年 6 月 20 日



図9-1 十勝岳 振子沢噴気孔群の噴気活動状況の推移

南東方向の三段山（図3の⑦）から撮影（上図は下図中の橙破線領域を拡大）。

- 前回（2021年6月）の観測と比べて、活発な噴気孔の増加や噴気域の拡大が認められます。
- 昨年見られなかった新たな地点からの噴気活動（黄矢印）が確認されました。



図9-2 十勝岳 振子沢噴気孔群の噴気活動状況の推移

東南東方向（図3の⑧）から撮影

- ・ 昨年には見られなかった新たな地点からの噴気活動（黄矢印）が確認されました。
- ・ 2015年に山麓の監視カメラで確認された振子沢噴気孔群の噴気活動再開以降、時間の経過とともに噴気量が増加しています。

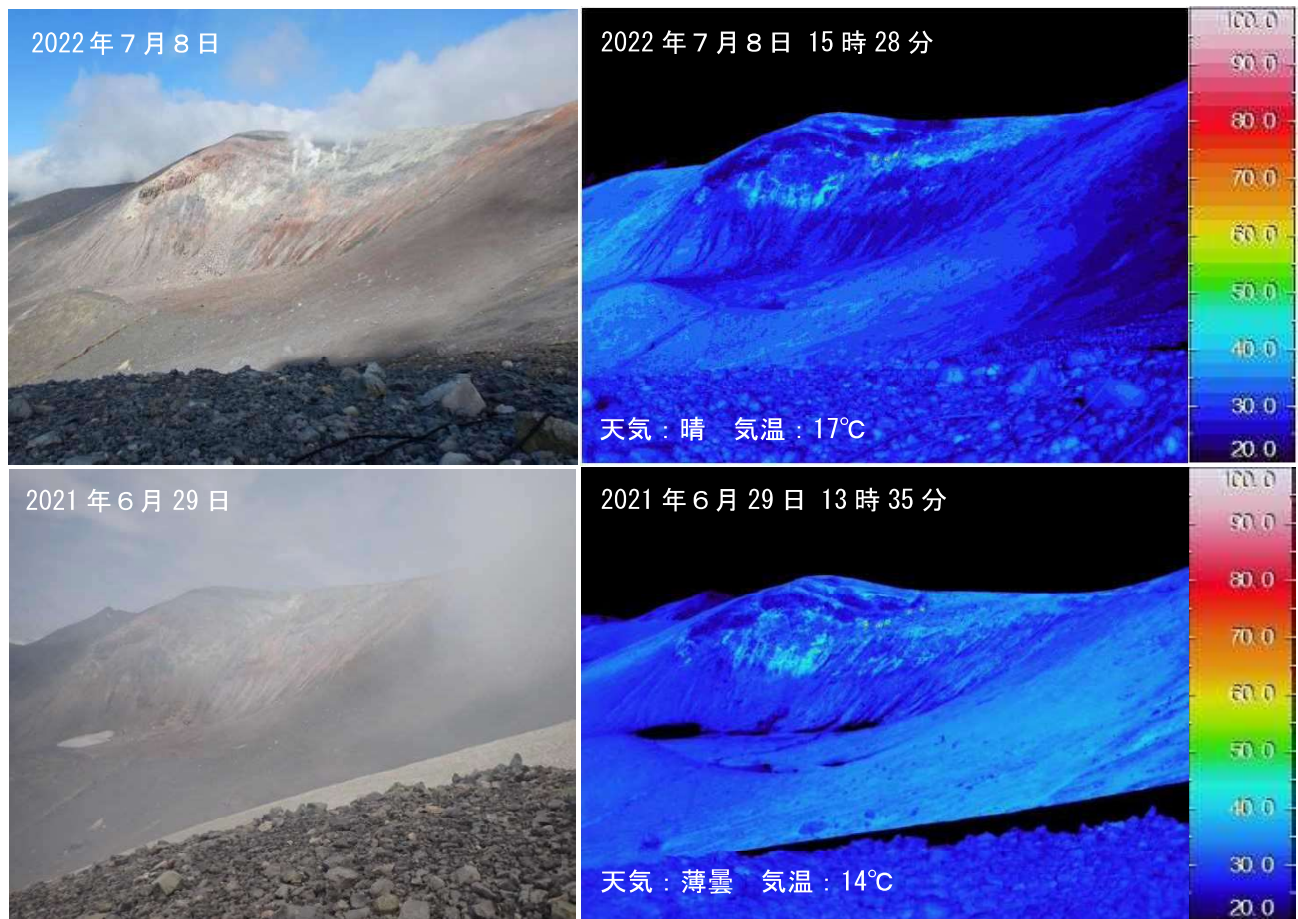


図10 十勝岳 赤外熱映像装置による大正火口東壁の地表面温度分布
南西側（図3の⑨）から撮影

- ・前回（2021年6月）の観測と比べて、噴気の状態や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

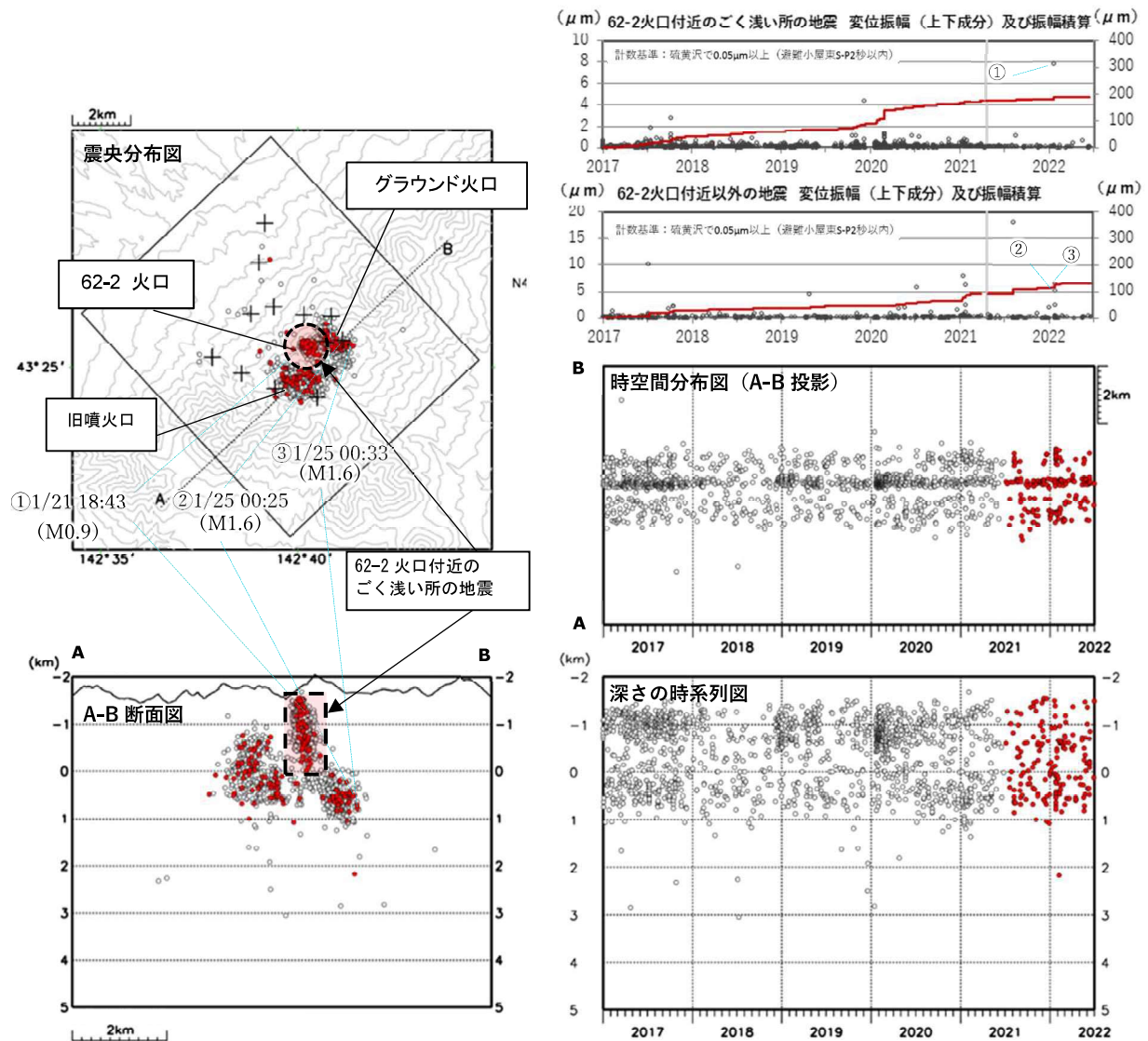


図11 十勝岳 火山性地震の震源分布と硫黄沢観測点での火山性地震の振幅の推移
(2017年1月～2022年6月)

● : 2017年1月～2021年6月の震源 ● : 2021年7月～2022年6月の震源

+: 地震観測点

①②③ : 2022年1月下旬に発生した主な火山性地震

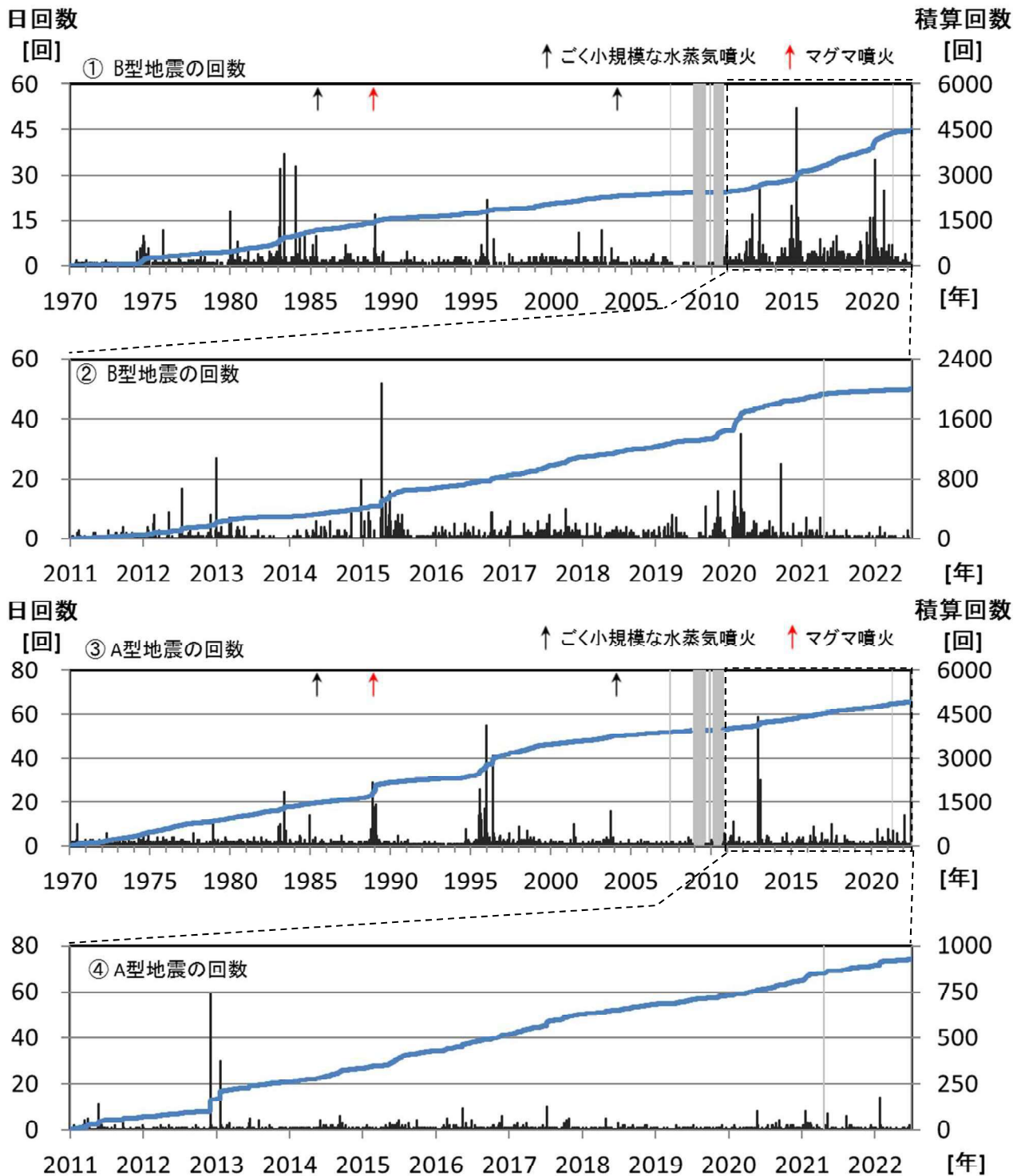


図12 十勝岳 地震の日回数及び積算回数 (①③：1970年～2022年6月 ②④：2011年～2022年6月)
硫黄沢観測点(山麓点)で計測した回数(計数基準：0.05 μ m以上)を示します。
B型地震①②は主に62-2火口付近のごく浅い所(図11中の破線に囲まれた領域内)、A型地震③④は主にグラウンド火口周辺や旧噴火口付近で発生したと推測されます。
図中の青線は積算回数を示し、灰色の部分は欠測を示します。

- ・62-2火口付近のごく浅い所で発生するB型地震は、山体浅部における火山ガスや熱水などの活動に関連して発生していると考えられます。